

京都大学	博士（地域研究）	氏名	伊藤 義将
論文題目	エチオピア南西部高地における森林利用と植生の変遷-コーヒーの森の社会生態誌-		
（論文内容の要旨） 本論文は、エチオピア南西部にみられるアラビカ種のコーヒーノキ（<i>Coffea arabica</i>）が育つ「コーヒーの森」に着目し、その森と利用者の関係を、政治生態学、文化生態学、歴史生態学という3つの観点から分析することによって、この地域における森林の利用と植生の変遷の特性を明らかにしたものである。 本論文で用いられる資料は2004年から2009年のあいだにエチオピアのオロミア州南西部に位置するジンマ県ゲラ行政郡において行なわれた長期のフィールドワークによって得られたものである。 序章では、本論文がアフリカ高地林の非木材森林生産物としてのコーヒーを扱ううえで意義と限界について述べたうえで、エチオピアに特異的にみられる <i>C. arabica</i> が半自生(野生)的に生育する森林を対象とした先行研究を紹介している。 2章では、調査地の概要を、自然環境、社会経済的背景、生業などについて説明し、本論文における地域の位置づけをおこなった。 3章では、政治生態学という観点から14世紀から20世紀までのあいだにみられたコーヒーの森に生じた出来事の動態が、エチオピアの国家レベルの政治的な動きと密接に関係している点を文献と聞き取り調査をもとに明らかにした。研究対象地域には、14世紀頃にはすでにオモ系民族による王国が成立しており、16世紀に入ってからクシ系のオロモがこの地域への移住をはじめた。オロモは既存の王国の体制を基盤にして、異なる民族も受け入れながら王国群を発展させ、その発展期には大規模な森林開墾が行なわれた。しかし、19世紀後半にエチオピア北部に住むセム系民族が侵攻し、戦乱の過程で人口が激減した結果、森林が回復したとされる。その後、社会主義政権の輸出振興政策や各地でコーヒー豆の生産が盛んにおこなわれるようになったのにあわせて、この地域でも、<i>C. arabica</i> が生育する森林はコーヒー豆の生産を主目的に維持され、標高が高く <i>C. arabica</i> が生育しない地域の森林はオオムギなどの穀類栽培のために開墾されていったという。このように、森林は、一般的にとらえられているように減少する一方ではなく、増加する場合があり、それらの現象がみられる時代や社会の背景も異なっていることを明らかにした。 4章と5章では、文化生態学の観点から、コーヒーの森において地域住民が行なうコーヒーに代表される非木材森林生産物採集活動の実態を参与観察によって詳細に記述している。特に、森林内での採集労働のすすめかたと、採集物の分配に関する慣習的なとりきめの内容を具体例の描写によって明らかにした。コーヒーの森の保有者にとってコーヒーの果実採集は大きな現金収入源である一方で、コーヒー果実の採集作			

業を森の中で行なう人々の多くが、森を保有しない季節的な労働者であり、10代の青少年が主の季節労働者にとっては、仕送りや持ち帰りを前提とした出稼ぎというよりは、お小遣い稼ぎという性格の活動であることを示した。ハチミツならびにコロリマと呼ばれるショウガ科の香辛料植物 (*Aframomum corrorima*) の採集活動の詳細を明らかにしたうえで、仕事量に比して得られる現金収入は少なく、現金稼得という目的以外にも人々を年に1度はコーヒーの森に向かわせる動機づけがあることを示唆した。

6章では、歴史生態学の観点から地域住民によるコーヒーの森の利用が森林植生に与える影響について、植生調査と、木材資源利用に代表される人為的攪乱活動の観察、および当事者からの聞き取りをもとに、植生の変遷と人為的攪乱の相互的な関係に関する考察を行なっている。その結果、コーヒーの森の植生の成立にはコーヒーの果実を採集する際に行なう森林の下生え刈りと *C. arabica* の競合樹種を取り除く活動が深く関係していることを指摘した。またコーヒーの果実の採集以外にも *A. corrorima* の採集を行なう際に人々が低灌木を取り除く作業、またはハチミツ採集に利用される巣筒を作成するために樹木を伐倒する活動も *C. arabica* の生育に適した環境の成立を促していると推察している。更にコーヒー豆の市場価格の年次変動に対応して、コーヒーの森で活動を行なう人びとの労働量にも変動が生じることによって、コーヒーの森の植生に対する人為的攪乱が制御されている側面があることを示した。コーヒー豆の市場価格や結実量は *C. arabica* が示す隔年結果という性質とも深く関係しているため、人間からの一方的な関与によって森林が変化しているという観点よりも、*C. arabica* という植物の性質が人間の行動を規制しているとみることの妥当性を検討した。そのうえで、コーヒーの森の植生は植物と人間の相互的な関係に影響を受けながら発展してきた可能性が高いと結論づけた。

最終章では、地域研究において政治生態学、文化生態学、歴史生態学という3つの生態学の観点から研究を行なったことを総括し、このようなアプローチをとることによって、コーヒーの森周辺で現在実施されている住民参加型の森林管理プロジェクトの問題点と可能性を指摘することが可能になり、今後のアフリカにおける森林保全活動において本論文が採用した観点の有効性を主張している。

(論文審査の結果の要旨)

アフリカにおいて問題化される森林と地域住民の関係は、極少数の例外的な事例を除けば、守られるべき自然資源とその破壊者という対立の構図においてとりあげられることが常であった。あるいは、従来の自然保護計画のなかで展開される森林保全と開発の試みは、いかに住民に森を利用させないかを主題にしてきたといえるだろう。その一方で、住民の燃料や手っ取り早い現金収入源として森林資源の消費が生活に不可避であるということも事実である。エチオピアにおいてもまた、森林の減少が問題視され、いかにそれを保全するかが国家レベルの課題として政策的にも取り組まれてきた。

本申請論文は、エチオピア南西部の高地森林における地域住民と森林を対象に、特にその重要な構成要素であるコーヒーの利用をめぐる人びとと森林の関係とその変遷を、濃密なフィールドワークによって多層的、多面的に明らかにしようとした意欲的な試みである。本論文は、エチオピアにおける森林と地域住民の関係を示す研究事例としてだけでなく、アフリカにおける森林と人びとのよりよい関係を考察するうえで重要な新しい視座を提供してくれる。

本論文は、以下の点において学術的に高い評価をすることができる。

まず、当該地域の入手可能なイタリア語等の歴史的文献を網羅的に渉猟して、14世紀以降の王国の盛衰や民族集団の移動が、森林の減少のみならず予期せぬ増加に影響を及ぼしていた可能性を確認した点は、従来の歴史研究の記述を活用して、フィールドワークの成果と連結して論じる手法を有効に用いた貴重な研究の成果として高く評価できる。この成果とあわせて、森林の増減という現象が、国家レベルの政策にも容易に左右されうるという指摘は新しいものとして評価できる。

さらに、本論文が高く評価できるのは、エチオピアの「コーヒーの森」内部における人間の活動という、これまで全く調査研究されてこなかった対象とその実態をつぶさに観察し記載した点にある。森林内部におけるコーヒーの採集活動からその慣習的な分配方法、ハチミツ採集のための蜜筒を設置してから採集するまでの活動、林床からの香辛料植物（コロリマ）の採集活動など人びとと森の関わりを示す一連の行動の微細な描写は、同時代の生業の記録として大きな価値がある。

本論文の学術的意義は、アフリカにおける人と植物の関係論的視点から、エチオピアの高地林に対する人間の活動を人為的攪乱としてとらえ、基礎的な植生調査をおこなって、利用される非木材森林生産物の定量的な調査をおこなった点にもある。コーヒーやコロリマなど非木材森林生産物の収量と、植生の人為的攪乱とのあいだに正の相関がある可能性を本論文では控えめな表現で記述している。人に利用されることによってよりよく維持される植生としての森林という、近年注目されている森林保全のあり方に関する研究にとっても積極的な貢献をなすものと考えられる。

人と植物の相互的な関係としてエチオピアの高地における森林と地域住民の関係をとらえる視座は、従来の人間中心主義的な森林保護政策を再考するうえでも重要な示

唆を与えてくれる。地域住民の意向を最大限反映させるという趣旨の参加型森林保護開発計画において、本論文のような地域研究の成果が実践的な意義をもつ可能性を示しているといえよう。

以上のように、本論文は地域の生態・社会・文化の深い理解を基礎にした地域研究の発展をめざす本研究科の研究成果としてふさわしい内容を備えた優秀な論文であると判断できる。

よって、本論文は博士（地域研究）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成 23 年 6 月 3 日、論文内容とそれに関連した事項について試問した結果、合格と認めた。